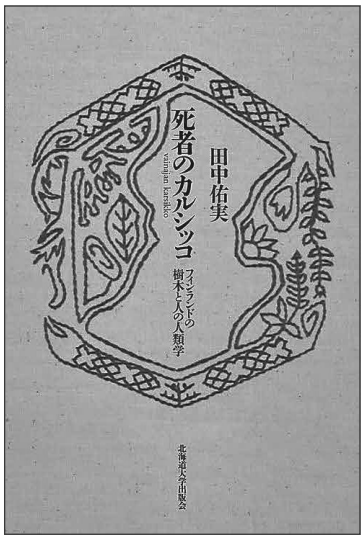
何年経っても忘れられない、編集者の一冊《14》

田中佑実著『死者のカルシッコ――フィンランドの樹木と人の人類学』

川本　愛（北海道大学出版会）



カバーデザインには、著者の田中佑実先生が本書のために制作した刺繍を使用。カレリア地方の伝統的な刺繍をリスペクトしつつ、人間と樹木が混ざり合う様子を表現した。刺繍された布のサイズとカバーのサイズがそのままでは合わなかったので、刺繍部分と背景の布を印刷会社で撮影・合成してカバーデータを作成した。
装幀：須田照生、印刷：アイワード、製本：石田製本［北海道大学出版会・2023年／四六判上製・244頁・定価6380円］

「死者のカルシッコ」は、亡くなった人のイニシャルや生没年などの印を樹木に刻むフィンランドの風習である。著者の田中先生が二〇一六年にカルシッコについてのフィールドワークを計画したとき、この風習はフィンランドにおいてすでにほとんど行われておらず、フィールドワーク受け入れ先となるヌーティネン家を含めた一握りの人たちだけが個人的に行うものとなっていた。本書はヌーティネン家での長期滞在をもとに、「樹木」「死者」「生者」の三者の繋がりから「生（エラマ）」を考察する試みである。

本書は博士論文を土台としており、書籍化にあたって一般読者にも読みやすくなるよう、先行研究分析の圧縮や、アーカイブ資料引用の巻末付録への移動など、大幅な書き直しを田中先生にお願いした。本書の編集担当に決まってからマルチスピーシーズ人類学の本を数冊読んだ程度の知識しかない編集の意見をよく聞いてくれたと思う。また、より視覚に訴えるため、田中先生にフィールド先の樹木や家屋の挿絵を依頼したところ快諾していただいた。さらにカバー図版も「カルシッコを刺繍で表現したらどうでしょうか」とお願いしたところ、写真のようなすばらしい刺繍を仕上げていただいた。

「この研究成果をどうしたらもっと多くの人に伝えられるか」ということを学術出版の編集者としていつも意識するようにしているが、本書の場合、研究成果という以上に、樹木とともに生きるヌーティネン家の日々の暮らしに私は魅了され、校正用のゲラを読むたびに内容に引き込まれた。

「風習が終わりを告げつつあるいま、この時代に、カルシッコの風習を続ける人々がどのような想いでこの風習を続け、樹木、死者、生者の多様な繋がりの中で生きているのかを記し、後世に伝える。これが本書の使命だろう」と「はじめに」にある。誰かが記録しなければ埋もれてしまうだろう生のささやかな営みを記録し未来に届けることは、学術出版の使命にも重なる。

大学出版

The Association of Japanese University Presses

No.139
2024.8
夏

[特集] いまこそ、学食!!

学食改革素案　藤原辰史　1

学生に食を提供しつづけて
——生協食堂の取り組み　大築匡　6

偶然をつくる食堂
——ダイニングラボ・食堂コマニ　川添善行　12

「学食」をデザインする
——学生視点を取り入れた共働プロジェクト　安藤拓生　17

[連載] 何年経っても忘れられない、編集者の一冊《14》
田中佑実著
『死者のカルシッコ——フィンランドの樹木と人の人類学』
川本愛　表2

大学出版部ニュース　23

一般社団法人
大学出版部協会

大学と社会を結ぶ 知のネットワーク